

# 小樽の海岸を考える 海岸活用による魅力度の向上



忍路海岸

小樽は、どこに住んでいても、少し高い所に上るとたいていは海を望むことができます。祝津マリーナから出帆したヨットの白い美しい船体の大型フェリーが行きかう姿を毎日眺めることもできる海岸の存在は小樽の大きな魅力です。

今回は、小樽の海岸について考えてみます。

## ■長い海岸線

石狩湾に面して寝そべるように広がる小樽市には、約69kmにも及ぶ長い海岸線があります。その海岸線の約6割は道路や護岸などの人工物が無い、自然のままの海岸だとされています。海岸には、一部に私有地はありますが、ほとんどは国有地であり、基本的に誰もが自由に利用できる公共の財産として位置付けられ、北海道が管理しています。



銭函海岸大浜

カムイコタン(張碓付近)と呼ばれていた海岸に鉄道を敷くことは困難と言われ、断念することも考えられましたが、開拓使の御雇外国人のクロフォード技師が鉄道敷設をやり遂げて、今日に至る歴史があります。



海岸線を走る電車

## ■小樽港

旧小樽市に面する海岸は、北防波堤と南防波堤に囲まれた現在の小樽港です。若竹海岸から手宮海岸にかけての埋め立てによって港が築かれ、自然のままの海岸は勝納川の河口にわずかに感じられます。

港湾として物流機能を中心となっていますが、昭和61年の運河埋立の際に、国の「歴史的港湾環境整備事業」が導入され、人流れや海岸縁の鉄路、背後の丘の斜面に広がる住宅地に囲まれた海岸線の雰囲気が良く、散策に適した海岸です。



(図1)

**■銭函から東小樽海岸まで**

旧朝里村に面する海岸は、銭函、張碓、朝里、東小樽の海岸です。

銭函海岸は広い砂浜が続き、遠浅になつてることから人気のある海水浴場になっています。また、石狩湾新港方面は、豊富な海浜植物や天然の海岸林が残る全国的にも貴重な自然海岸です。小樽の地名となつた「オタ・オル・ナイ」(砂浜の中の川)は元々銭函付近のことだと言われています。

近年、銭函は人口が増えていますが、海岸を始めとする豊かな自然やカフェなど、お店の増加により、札幌などの都市住民で自然志向の高い人々が集まっていることが、増加の原因の一つに考えられます。また、電車の窓からはサー

芬園を楽しむ人々の姿もよく見られ、銭函のスタイルとして定着しています。

銭函から東小樽までは、海岸の背後に崖が間近に迫り、約11kmにわたつて水際を電車が走つていますが、多くの旅行者や観光客が、車内から広がる海を目の当たりにして歓声をあげ、盛んに写真を撮る姿を目にします。通勤通学者にとっては、いつもの変わらない風景ですが、観光資源として貴重な景観であり、効果的なPRが求められます。札樽間は道内初の鉄路であり、特に銭函・朝里間にある

朝里海岸は、なかにし礼の『石狩挽歌』にも謳われている浜で、石浜続きの海水浴場がありますが、戊辰戦争で敗れた会津藩の人々が北海道に移住するために最初に上陸した歴史のある海岸です。近年では、その風景の良さが取り上げられ、外国映画のロケ地となり、外国人観光客が殺到して線路に立ち入るなど問題になりましたが、朝里海岸の持つポテンシャルの高さを示すものだと考えられます。

東小樽海岸は、昔、熊碓と呼ばれていましたが、その基部周辺において、14万トン級の大型クルーズ客船の受け入れ施設や、小型観光船乗り場、水際線の緑地整備など、人流・観光エリアとしての賑わいづくりが進められています。

小樽築港エリアでは、マリンジャーの拠点として貯木場だった